

ミラノー東京；ビジネスマンの「らしさ」

岡林みどり

ポーラ文化研究所（東京都中央区銀座1-7-7）

KYL00535@niftyserve.or.jp

94年から95年にかけてミラノと東京で行なったビジネスマン60名のインタビューにより両都市での仕事や家族、余暇やファッションへの関心を比較した。その結果日本での家庭内での棲み分け役割分担の強さを抽出した。

それは日本では、背景があつての紋であることが軽んじられてきたことの結果でありかつ原因ではないかと考えた。そのことを俳句の解釈論争と外来語の省略形の多用の問題や教育はじめ評価の根本問題に繋がっていることと、そのような結果を東京に固有の問題と考えるよりもアフオーダンスなどの問題意識とも共有できる課題として考察した。

1) はじめに

この研究を始めることにした93年にはバブルがはじけて次の新しい姿が見えない時期で、年功序列や終身雇用制が鎗玉に上げられ、サラリーマンの行く末は暗澹たるものという見方が流れていました。右肩上がりの成長の後のモデルが見えなかったのです。そういう中で引き続きアメリカだけを鏡とすることに疑問をもちました。そこでヨーロッパの中でも古い文化が残るイタリアで東京と同じような忙しい国際経済都市であるミラノの人々との対比を計画しました。

当時出生率も低下し騒がれていましたが、いくら非婚層が増えても、社会の長期的な土台は結婚して父親になっていく男性とその家族が担うので、今回は父親である2つの世代を比較し、変っていくものと変わらない部分を抽出したいと思いました。(ミラノ-東京ビジネスマン60名のライフスタイル比較調査報告書(非売品)；ポーラ文化研究所、1995)

調査は94年ミラノで、95年東京でインタビューを行なった。仕事や家庭生活、妻の職業、育児、余暇やフ

ァッションなどについて聞き取り、結果について表1のように要約した。この内容を更にイメージ化したのがその下の図である。これは東京ではインタビューをする場所が会社や自宅ではなく喫茶店が多かったため、ミラノでは当然のごとくそれぞれのオフィス(それも定型的な応接間ではなく)や家庭で行なわれたためである。

しかしこの図は単に調査の実施態様を表しているのみならず、東京とミラノで考えられている「自分」というものの本質的な違いを取り出してしまったのではないかと考えられる。すなわち東京では「自分」というものがオフィスや家庭から切り離しても成立する、あるいはむしろ切り離して、取り出されたものが「本当の自分」であるとすら考えているのに対し、ミラノでは「自分」というものはオフィスや家庭という「背景」に属していることを前提としているということではないかと思えます。

このことを、あの「老婆と若い女=地と紋」のテーマにからむ認知性向の問題として今回考えてみたい。

Observation on how we think about ourselves by the comparition with businessmen in MILANO

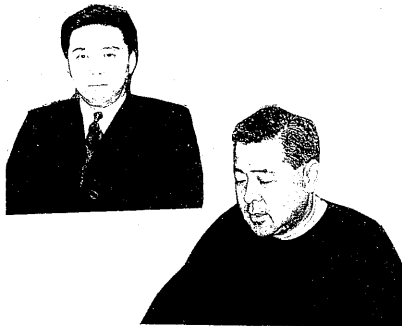
MIDORI OKABAYASHI

(RESEARCH INSTITUTE OF BEAUTY AND CULTURE OF POLA COSMETICS)

We interviewed 60 businmen in MILANO and TOKYO, about their own lifestyle. The most interesting was, that JAPANESE have distinct domain and different roll in their family. So they try to concern at least with each other. The way of their living comes from , and at same, makes an effect on the way of thinking less concereneing to background.

This was considered with HAIKU, expression in mass media, educational selection and conception of afor dance.

表1	ミラノ	東京
仕事	<ul style="list-style-type: none"> ●多彩な仕事モデルが共存 ●高い仕事への満足度 ●独立も転職も自然体で 	<ul style="list-style-type: none"> ●両世代とも高い仕事への満足度 ●J世代で明確な仕事のイメージ ●S世代の関心は老後へ
家庭 家族	<ul style="list-style-type: none"> ●強い夫婦の一体感 ●共働きベースの現実的な家庭 ●子供との関係は情愛が基本 	<ul style="list-style-type: none"> ●家庭は子育てだけの場 ●妻が働くことは妻の勝手 ●子供への情愛と実家重視
余暇	<ul style="list-style-type: none"> ●長期バカンスは人生の基本要素 ●週末で生活のメリハリとリズムを 	<ul style="list-style-type: none"> ●遠慮がちな自由時間 ●余暇も仕事のうち
おしゃれ	<ul style="list-style-type: none"> ●服装も自己表現・香水も ●住まいにも好みとこだわり 	<ul style="list-style-type: none"> ●自己表現は苦手 ●住まいのことは妻の領分
全般	<ul style="list-style-type: none"> ●生活各領域への第一人称で参画 	<ul style="list-style-type: none"> ●家庭にいても暮らしは他人事



喫茶店などで「個人」としてお話いただいた日本でのインタビュー



自宅やオフィスでゆったりと行なわれたミラノでのインタビュー

2) 「文脈」の欠落とは「評価と意志」の欠落である

●「ハレとケ」

「住む方は人に譲り、杉風が別所に移るに、
草の戸も住替わる代ぞひなの家」

復本一郎氏は「おくのほそ道」冒頭の解釈を巡り、従来の通説はこの句が最初に実態的に詠まれた場面を

ことさらにほじくり出して、その些末な知識の断片を絶対化する解釈であると断じている。通説の根拠は金箔を散らした豪華で華やかな短冊に記された句文によっている。

「むすめ持たる人に草庵をゆつりて

草の戸もすみかわるよや雑の家 ばせを」
芭蕉が自分の住処である草の戸をパトロンで娘が

いる杉風に譲った時に詠んだ事は事実であり、そうであれば「草の戸＝雛の家＝杉風の新しい別宅」である。だが最初に詠まれたのはあくまで「ケ」の文脈にあるもので、「おくのほそ道」の冒頭の句は、まさにここに位置づけた芭蕉の意図をもとに、すなわち「ハレ」の文脈にあるものとしての解釈を成り立たせるべきであると言われている。すなわち芭蕉がもっとも恩義を感じているパトロンである杉風の別宅から奥の細道への旅を始めた事を世間に知らしめ事を意図していたとすれば「草の戸＝芭蕉の住処、雛の家＝杉風の別宅」となる。(笑いと謎；角川選書,1984)

●「総選挙の投票率」

出生率が下がったときも大騒ぎだったが、出生率の定義は15歳以上の女子の出生数から導かれるのであるから、当然晩婚化が続く限り、出生率は下がるのである。問題は30歳以前に第一子をもうけた夫婦は、従来は第二子出産を迎えたが、30代以降第一子をもうけた夫婦が一人っ子で終える可能性が高まる事であった。そういう分析無しに「問題だ」という発言が多かった。つまり出生率を取り巻く歴史的社会的背景分析が次落して評論が量産されるのである。そして我田引冰的に育児休業だ、やれ、社会保障だ、やれ保育園増設だと大きな声が飛び交うのである。それをまかなうのは当然税金でということ。

今度の投票率もそうである。都市化は必ず投票率を下げるのは世界的傾向なのだから、東京一極集中がすすみ、さらに地方でも県庁所在地への一極集中が進んでいる以上、投票率が下がるのは当然なのである。その予測を越えた低下かどうかがまず提示されなければ「政党の政策」との関連は論評できないはずである。なのに「違いの無い政策」だから投票率が低いというような結論がいきなり飛び出す。これも日本の情報産業には、重要な問題は歴史的社会的背景分析から入るといふ前提条件が欠落しているからである。

だから「有森の投票呼びかけ」といういかにも代理店好みの「若年層の取り込みキャンペーン」に巨額の税金が使われても、なんら批判されない。だが少し考えれば、私たちがだって若い20代の頃は、誰に投票していいか判らなかつたし、関心も無かつた。「本当に投票率を上げれる、また上げるべきターゲットは誰なのか。」という分析がキャンペーンに先立って提示されるべき

なのだ。なんとなく「投票率向上は善」と言うような命題によりかかった税金の使い方を止める事が行政改革、あるいは小さな政府実現には必須なのに、そういう視点は何処にもなかつた。これは「目的の正当性が手段の正当性を実現する」という旧帝国陸軍、オウムを支えた「戦略の欠如」という致命的な発想法が現在においても連綿と我が国の主流の発想法として続いている事を示している。

●「リストラ」と「らぬき言葉」

「リストラ」はリストラクションの省略形である。リストラクションは外国語のre-structionのふりかな、つまり元々は難しい漢字につけていたルビでしかない。だが現在、「リストラ」にはre-structionの意味である再構築の意味はない。普通は「人減らし」と現在は解釈される。新聞での使い方をみればそい使用が多いから、そうになってしまい、そうなるとともにそういう使用が蔓延してしまう。一方「人減らし」には「雇用主の都合」と「それに振り回されるかわいそうな使用人」というイメージがあるが「リストラ」にはそういうイメージがない。もっと無いのが「再構築＝再建する責任」や、それを担う主体、つまり「雇用主の痛み」である。つまり「リストラ」には「人減らし」や「re-struction」が従えている物性がないのである。つまり記号でしかない。所詮はルビをさらに切りつめたものでしかない。それなのに、日本ではこの、なんとも情けない「リストラ」を中核に行政改革や規制緩和を行って21世紀の新しい国家像を作り上げるのだという。ところが文部省もマスコミも「らぬき言葉」問題は取り上げても、このような重要な問題は見向きもされない。これだけおしゃべりが早口になっている以上、「ら」があろうがなかろうが文意に大きな変化が生ずるとはとても思えないが、年取った人に耳慣れないというだけでこれだけ大騒ぎをするというのはなんとも解せない。言葉が文脈と一体である事を忘れて些末な表現を過剰に取り上げてことたれりとする文化風土がもたらしたものであろう。(注1)

同じ事は「パソコン」「ワープロ」という言葉にもある。「personal computer」は大型コンピューターを生み出した近代科学技術の功罪をひきつれている。「word processor」には西洋文明5000年の言葉の歴史が詰まっている。だが「パソコン」「ワープロ」はせいぜいNEC

やOASYS、書院といったブランド名と回路のゴチャゴチャに
つまった物(ぶつ)しか引き連れている。従って
「personal computer」や「word processor」という言葉
を使えば、私たちは放射能によって汚染されきった暗澹
たる未来を記述する事も、知恵をもちいて作り出され
るであろう輝かしい人類の希望をも語る事ができる。
だが「パソコン」や「ワープロ」という過去を引き連
れない言葉を使って記述できるのは、物(ぶつ)の奴
隷と化した現在のわれらの疲弊だけである。

以上のをまとめると、武士のたしなみである儒教に
対して江戸の町人が発達させた俳諧には「紋」という
ものが背景から独立しては成立しないことを重要視し
ていた。一方現在のマスメディアを中心とした言論界
は背景抜きの議論をしがちであり、さらにそれを補完
しているのが外来語、とりわけルビを短縮した、語源
も、用法の蓄積もわからない言葉の氾濫である。

江戸時代というのは土台は天皇制で(幕府の大奥の
公式行事は平安時代の古式にのっとったまま幕末をむ
かえる)その上に徳川幕府の建前がのり、実際の経済
力は町人が塩梅するという二重、三重構造になっていた。
まさに現実を動かすには「塩梅」というきわめて
非マニュアル思考でなければ立ち行かなくなるのであ
った。この時重要なのが文脈だったのである。だがこ
の肝腎なことは幕府の公式学問では取り扱えなかった。
少なくとも町人レベルにまでかみ砕かれた書物では無
理であった。そういう事を議論し思考をつめていく場
が町人の文化にはあったはずである。その片鱗が復本
氏の疑問において浮上してきたものと思われる。そし
て現在のマスコミや研究の主流がそういう先人の努力
から隔絶しがちであるといえるのではないか。

それは自分というものをいろいろな文脈におく訓練
ができていないからである。なぜならば仮に自分の意
志や評価を他者に伝えるためには、それを一度相手の
文脈において表現を工夫しなければならない。しかし
見かけの年功序列や左翼か右翼かといった既存の枠組
みの中で議論するときは、そういう努力はまどろっこ
しかり、生意気だということになりやすいのである。

つまり一人の人間としての意志や評価を欠如させる
ことが、30代までの日本人男性の場合は優秀という評
価を得るためには欠かせない行動様式なのである。

3) 「自分らしさ」を形成する他者評価の仕組 み

今回の調査を踏まえて小さな勉強会をする事になり、
ミラノでの調査を分担した人とさらにアルザスのスト
ラスブルグでお子さんを育てながら学位を取った方と
いろいろ話していて、文化の違いをもたらずと同時に、
文化の違いが鮮明に反映するのが教育ではないかとい
うことになった。

結論をいえば日本には決定的に欠けている大人の相
互批判と言語評価の客観性を実現するための並々なら
ぬ努力がイタリア、フランス、ドイツ、アメリカの学
校では行われているという事である。教師の自分に向
けられた真摯な言葉の積み重ねとその努力によって、
子どもは次第に自らを表現する「言葉」を獲得して
いくのである。あるいはA先生という背景におかれた自
分とB先生を背景にしたときでは「自分」が異なる。
それは先生の良し悪しでもなく、それが社会に生きる
「自分」だという経験をつませて、かつそれを言葉化し
ていくのである。

ミラノの小学校では試験はすべて口頭試問で、クラ
ス(といっても20人以下の生徒数)の友達が見ている
前で担任と一対一で口頭試問が行われ、結果について
は友達も本人も異議を申し立てられる。さらに学年末
試験は別の学校の先生が来て同じような試験をする事
で先生の教え方やあるいは生徒一人一人についての個
性や適性についての先生同士での評価や批判が保証さ
れる。フランスでも口頭試問の筆記試験への優越性は
変わらないという。だがそれがドイツになると圧倒的
に筆記試験重視になるらしい。私の知る限りアメリカ
も筆記試験重視である。

確かに宗教改革には聖書の現地語化認可が入ってい
た。従ってラテン語圏では中世も一般の人々が聖書を
十分に理解し意味をやり取りできていたが、ゲルマン
人にとっては、ラテン語の読み書きができる知識人の
みが「正しい」時代があったのであろう。いくら母国語
で弁がたってもラテン語で書ける事が必須とされたの
であろう。だがそれでも日本のように点数をつけて終
わりというような仕組みではない。

ニューヨークでもちょっとした進学校ではA4一枚
のレポートが各教科毎に父母に学期毎に先生から送ら
れてくるという。内容は前の学期の到達度と学科の要
素別の優劣、そして今学期の本人の努力目標、それに

対して教師がどういう指導をしたか。そして結果の評価。さらに次学期に向けての本人と教師の努力目標の確認と父母に気をつけてもらいたい事項。とえんえんと続くという。こういう積み重ねがあればこそ、高校の教師の推薦が大学によって尊重され、成果をあげるのであろう。

たとえば今流行のディベート。私立の中学に通っていた子どもも従来のような両論併記の結論だけを暗記して試験を受けるよりもはるかに興味をもって取り組んでいた。準備に半年かけ、校長先生の前でそれぞれのチームが競うというゲーム性もあって相当勉強していた。しかし結果については必ずしも満足がいったわけではないようである。いちおう技術的な課題として今後に残されたようであるが、もっと文化の背景にある発話と受話の生き生きした循環の体験の蓄積を意識した努力が必要なのではないだろうか。つまり子どもの場合は「煙草は止めるべきか否か」でのディベートだったのであるが、これは子どもにとっての切実なテーマというわけではない。

本来ならば登下校時の立ち寄りとか、制服における小物の自由度とかがテーマであった方が発話が自分に帰ってくるのである。しかし30年前に起きた制帽自由化の取り組みの体験からも、このようなクリティカルな、つまり実生活に即した問題を指導するだけの枠組みが教育する側に確立していないのである。しかしそこを避けては「言語化された自己」を早期に獲得させることができない。

あるいは現在、大学入試や偏差値が悪者になり、数学オリンピックや各種懸賞、表彰儀式を加えた登竜門の多様化がすすめられています。しかしこれらはいづれも結局はある一定のルールにもとずいて相対評価を行うという点で科学型のエリート選抜でしかありません。一定のルールとはつまりある種の枠組みであり、その枠組みに如何に適應していくかを早期から親子で取り組むようになってるのが現在の幼児教育の流行だと思います。しかも各枠組みの中では順位評価が強くまわっているのです。だからオリンピックの日本代表という人がテレビに出てきて、その人が哲学を披露しても、なるほど優秀な人だと納得させられることは少ない。つまり個々の狭い世界で優秀だというだけの事に終わってしまう。しかし激動の時代に求められる優秀さは枠組みを再編成する力であり、民主主義の成否は

幅広い人材によってこの能力が担われていくかということにかかっている。

現在教育改革や入試制度の改革の必要が叫ばれ、一方で情報公開も言われている。だが新聞で「内申書の情報公開」に関する記事が出て普通の人間にはピンと来るものがない。そもそも教育における評価は学習到達度を上げていく手段（通信簿の本来の目的=背景）であって、それに寄与しない評価は存在自体が無用である。それが悪意がある評価によって不利益を被ったと思う人がいて「公開の請求」に及ぶのであろうが、そのような評価はそもそも廃止すればいいのである。私自身も子どもの場合も具体的、建設的評価を学校の通信簿から得られた事はない。それ以外の教育委員会に向けたわれわれへの評価簿があるとすれば、ある事が間違いである。

従って情報公開やディベート、あるいは入試の多様化といった表面的な制度や技術の導入の前に、言葉に対する意識、あるいはたえず言葉を磨いていく事の必要性といった自覚が必要ではないかと考えます。それは日常生活における生き生きした会話の必要性と切り離すが事できないと思います。そしてその先に初めて言葉による子供たちの絶対評価の仕組みができてくるのだと思います。それがすなわち「自己の言語化=自分らしさ」なのだと思います。それが他者があって初めて成立する自己というものを、言葉によって自分の内部に育てていくことなのだと思います。そうすれば自分というものを容易に背景と切り離して、結局は自分が分からなくなるような人間（いじめ自殺、上司を庇う自殺、過労死など）を少なくすることができるのではないのでしょうか。

4) 今後の方向性；アフォーダンス（注2）、テッド・ネルソン、再び俳句

ちょうど情報メディア研究会の発足の前後に「誰のためのデザイン？」という本が出版されコンピュータ屋さんの世界で「アフォーダンス」ということが話題になっていました。私は以前の職場が商品開発の統轄をしていたこともあり、電通が87年に翻訳した「ポジショニング」という本を読んでいました。これは86年に原著が出るとすぐ翻訳されたほど広告業界ではセンセーショナルを巻き起こした本です。

私はすでに読み込んでいた「ポジショニング」に加

えてこの「誰のためのデザイン」を通読してアメリカでの認知科学を現実の産業に応用していった人たちの問題意識がようやく納得がいくようになりました。

「あ、この人たちは飽和成熟したこの産業社会で新製品を送り出す事の”意味”を考えていたのだ」「だから日本では既にいきまっていた広告業界では数年前に話題になり、コンピューター業界はここに来て成熟感、飽和感をやっと実感したのか」と。

私は「ポジショニング」の方が激しい現実をきっちり押さえているとおもいます。「誰のためのデザイン」では「デザイナーの力量や努力の余地がまだまだあるぞ」というかなり安易な結論に落とし込めます。その場合はここで評価されているデザイナーの力量は単に頭がいいとか悪いとかといったものに矮小化されやすいのです。そうすると「アフォーダンス」という概念で彼らが主張したかった、過激な部分が見えなくなるような気がします。

同じ頃、田中謙先生の紹介でテッド・ネルソンさんにお会いしました。この時の経験は非常に印象の強いものした。ネルソンさんは私の所属を聞くなり「化粧品会社がなんでコンピューターの研究をするの？変だね！」と言って頭をかしげられて「あ、わかった！化粧品って最古のヒューマンインターフェイスだものね」と言って握手してくださいました。

たった5分足らずの時間でしたが、この時の経験で、私たち日本の知識人、とりわけ指導的立場にいる人たちに決定的に欠けているものが何であったのか鮮明に理解できたのです。現在日本では異業種交流会が大流行です。しかし多くは勉強会の域を出れません。立派な陣容であればあるほどそういう傾向があります。

この情報メディア研究会もそういう壁に突き当たっていました。それは結局「異」と「会」と言うものをメンバー一人ひとりのレベルで確認していく作業がすすめられないからです。田中先生といっしょにコンピューターの研究をしているネルソンさんにとって化粧品の研究は何の関わりもない。どこまでいっても「異」でしかない。でも紹介された以上、shake handsしな

ればならない。なんの大義名分のもとに？

「コンピューターでは「会う」必然のない人だけだな。でも僕もコンピューターにしか興味がない野暮天ではないよ。僕はもっと広い興味とか志を持った人間だよ。だから君とも友達になれるし、なれたら嬉しいな。ヒューマンインターフェイスという場でならきっと君とも「出会う」ことができると思うよ」

それが私がネルソンさんから受け取ったメッセージでした。

「会う」ということはまず「異」を確認する事からはじまり、そして大義名分のもとに「いっしょ」ということを確認する。そこまでがなければならぬ。そのことがなかなか実現しない。だから簡単に「会」を作るけど「いっしょ」にやることはどれも勉強会になってしまう。そういう大義名分をきちんと場に応じて、相手に応じて切り出せるか。という事が指導的立場の人間に求められる重要な能力だという認識すらないのが日本の現状である。それがネルソンさんとお会いして痛感したことでした。

それはつまりところ文脈を相手に応じて、場に応じて、時に応じて的確に使い分けていく、あるいは作り出していく能力というものではないかと思えます。そしてそういう能力は、既存の枠組みへの適応努力だけでは得られない能力であり、そういう能力を獲得するための条件を考えていくと、それがアフォーダンスの突きつけている課題と重なるのではないかと思えます。

結局は一人の人間として「軽やかに」人間関係を切り結んでいくことの難しさと大切さに収斂していくと考えます。さらに、それは実は、本来日本人が大切にしてきたパーソナリティであったのではないか。少なくともそれを評価し重要視してきたからこそ俳句は芸術である以上に庶民の趣味であり続けてきたのではないのでしょうか。庶民こそが「軽み」の価値を引き継いできたのではないかと思うのです。面倒なようでも、背景、あるいは文脈から思考をつめ、生き方を作っていくことが「軽み」に到達する方法だと江戸の町人は知っていたのではないのでしょうか。

注1：「志す；石川九揚」（1996年ポーラ文化研究所「生活という癒し」に所集）

注2：afordance

人の認知は、人を取り巻く状況との積極的な交流を通して成立していると考えられる。人は状況に働きかけることによって初めて、状況の中に意味を見いだす。この時、状況の中において直接意味を引き出すものを、アフォーダンスという。（c a b e - l a b. ホームページより）